

北方の詩

高島高

山脈を駆けてゆく白馬のむれがある

空は虹のpanseを孕はらんでか

朝あけは雲など呼んで

いま山麓の雪を踏む牛群

草は見えない

この冷却の皮膚ひふ下に

草は生きている

このひろびろとした高原は生きている

ほのおするものはー氷だ

はりつめてこわれそうな

埋火うずめび

埋めてさえおけば

いつまでもいつまでもある炭火を

あなたが灰をとったため

ばあつと燃えてそして

こんなにも早く消えてしまった

母

母は

傷いたみやぶれた手風琴てふうきんです

故郷挽歌

——僕はこの若き日の詩編を愛するがゆえに憎む

雲は低くて暗く

その上光るのは

あれは立山連峰の雪のせいだ

こんな重ったい空気はめったにあるものではなく

(つるぎたてやま)

こんな鋭い山脈系はめったにあるものではないというのは

この地方の風景画家たちのエスプリらしいが

ところで僕はたった今午後三時五十分着の

上野発列車から下り立ったばかりの旅の男だ

列車つかれの眼窓がんそうには

はるか山脈の頂上の雪の層がきらきら光り

この停車場の古風なことは

いつまでたつてもまがった針の柱時計や

朽ちた四角柱の陰影やこわれた窓の窓ガラス

窓ガラスの外の積荷の影には

幼なじみのX町のNさんがいるようだけれど

僕はなるべく知らないふりをしたいので

切符を渡すと帽子を真深くかむり

さて雪道を先ず山麓の方に向けてとりたいたいと思う

町の中は今もやっぱり魚屋さんやお菓子屋さんや

銀行や荒物屋さんでにぎわっているだろうけれど

僕は今では帰郷者でもなく成功者でもなく

一介の行きずりの旅の男だし

又町中自転車や乗合自動車をさけたりするのがうるさいし

それにもまして町湯まちゆの噂うわさたちに花さかせてやるのは業腹いへはらだ

僕の生まれた町だというのはあの雪の中の灯だけでけっこう

あの灯たちを一つ二つとかぞえながら

今日はせめて夜中まであの山麓の雪道でもあてどなくさまよい歩いて

みよう